

# たそがねけんぱり

## 平成15年度 第2回 剣道初二段審査会 合格者36名



第7号  
 発行場所 町原市石原  
 高崎市武道館内  
 発行責任者 高崎支部  
 剣道連盟 高崎支部  
 広報担当 上條

二月十一日建国記念日高崎武道館で、平成十五年高崎支部第二回剣道初二段審査が開催されました。

市内の中学、高校、一般の人たち三八名の剣士が挑戦しました。

開会式では本多審査委員長が「全員合格することを祈ります。」と激励の挨拶を述べられました。

またこの日は群馬県剣道連盟会長中島先生が特別観覧されました。

この本番の日に遡ること三日前の二月八日に受審のための事前講習会が開催されました。この講習会にほとんどの挑戦者が受講して万全の心持ち



諸作の指導を厳格に



初段女子：実技模様

での本番ですが、重ねて開会式の後に、橋本支部長そして藤木事務局長が入念に受審のポイントとして諸作法を丁寧に指導いたしました。

剣道を始めたからにはぜひ初段はとっておきたいと誰しも思うところだと思います。それはやはり、ある時間剣道について考え、

### 合格者氏名 (受験番号順)

【初段男子】 田島和弥、関口惇也、箱田浩之、福田竜司

鈴木敬文、佐藤優介、星野圭治

【二段女子】 樋口美咲、清水美奈、下谷麻子、高橋由美子

竹内静江

【初段男子】 佐藤翔悟、荻原達也、加藤溪太、小泉吉弘

清水健地、本島吉就、角倉大二郎、小谷野俊

植原功基、木村与世布、戸田智行加藤和記

渡辺涼、上原翔平、佐野友紀

【初段女子】 荒瀬麻也子、市川友美、羽鳥七美、柴崎智子

下谷鮎美、小見曜、竹本尚美、早乙女恵子

佐藤真由美

学びそして剣道を通じて先人たちの想いに触れたんだとゆう大きな証になるからだと思えます。でも剣道をはじめて一年位では当然ながら段位なんて簡単にはいただけません。なが〜い時間を稽古



2段ともなると目付のかがやきが

に費やし剣道を想って、

感じてみなくてはとても授けていただけれるものではありません。

事前の講習会や当日の指導によりみなさんよくよく受審のポイントを身につけられました。審査で一番大切なのは、気合いい、打ちきること、そしてなによりもしっかりと審査員の先生方に自分の剣道を見ていただきたいと思うことです。その点みなさんは大変自信をもって演じたと思います。剣道形の審査ではちよつとつまずいてしまった人もいましたが、落ち着いてやり直しを見事にしてくれました。



久々での地元観覧：中島会長先生

### 剣道と子育て 高橋 由美子



今小学校四年生の息子が小学校へ入学する頃子育てについてとても悩みました。ちょうどその頃剣道を通して子育てをした

た方のお話をお聞きし息子と主人が剣道に挑戦するようになりました。

初めは「メン！」と声の出せない息子に先生方も主人も随分苦労したようです。その後、しばらくして息子に背中を押され私も剣道を始めるようになりました。「自分に自信の持てる子に育って欲しい」「何か好きな事を持てる子になって欲しい」・・・そんな思いで始めさせた剣道が今の息子には「大好きな剣道」となり、将来の夢や希望を語る時「剣道」抜きでは考えられないものになりました。手ぬぐいが付けられない、面ひもが結べない等々、なにもできなかったところから家族と一緒に練習しました。今振り返ってみると大きく成長する過程を共に歩めたことは親として貴重な体験をすることができたと思います。まだまだ未熟な親ですが「剣道」を通して親子で共に成長できたらと思います。

剣道教室の先生方をはじめ、剣道教室のみなさんそしてたんぼの会の皆さんには親子で本当にお世話になります。たくさんの方々に応援していただきここまで剣道を続けることができましたことに感謝の思いでいっぱいです。

日頃先生が言われている「正しい剣道」「美しい剣道」そして「礼儀」を大切にすることを忘れずにこれからも親子で共に精進してまいります。

### 形と剣道

剣道二段 高崎東高一年 福田竜司

剣道を始め四年前、私は昇段審査に向けて高崎武道館で開かれた日本剣道形講習会に参加しました。講習会が始まる前に「剣道形の上手な人は、剣道も上手だ。」という先生の話を聞きました。前回私が剣道形を練習したのは二年前の初段審査の時、それ以来一度も練習をしていませんでした。そのため忘れてしまった部分もあり、講習中に注意されることがありました。また、あらたに取り組んだ七本目の仕太刀が上手くできず講習会の間、集中的に練習をしていました。それでも納得できず、講習会終了後も残って練習をしていました。その様子を見ていた先生方が色々と私を指導してくださいました。練習を終えてわたしが帰る時に、先生の一人が「剣道型は家の中で木刀を使わなくてもできる剣道の基本だからしっかり練習をしろ。」とアドバイスをして下さいました。そして先生のアドバイスを基に家では木刀を持たずに動きをイメージしながら練習をし、部活では、顧問の先生のご指導の下で練習をして何とか昇段審査に合格することができました。

私は、今まで剣道形は昇段審査の科目だから覚えようとしていました。しかし講習会に参加し、先生方の話を聞き練習をしていくうちに剣道形は剣道の基本であり正しく理解することが重要だと考えるようになりまし。

私は今回剣道形の練習を通して学んだことを今後の剣道に活かす、更に精進したいと思っています。

最後にありますが、ご指導を下さった顧問の先生と諸先生方そして夜遅くまで練習に付き合っ下さった先輩に感謝したいと思います。



### 仲間と剣道

剣道初段 高崎女子高一年

小見 曜



私が剣道を始めたくっかけは本当に単純なものでした。小学生のときに一度辞めてしまった剣道ですが、その時は自分の甘さがきっかけでした。だから高校に入って剣道をしてそんな自分を鍛えようと思いました。しかし

やはり剣道というのは楽ではありませんでした。自分に厳しくと思っても次第に呼吸が苦しくなり、打突が甘くなり、自分に甘えたいという気持ちになります。そんな時私の周りを見ると、同じように疲れていようと、部活の雰囲気高め自分を限界まで動かすつづける仲間達の姿がありました。その中で部活をしていると、疲れていてもあと一回頑張ろう、あと一本打ち切ってみよう、という気持ちになります。そして練習が終わった時、仲間と共に乗り越えたという、言葉に言い表せない達成感がありました。自分に甘えたいと思った時、仲間の姿を見ると、勇気が湧き、力を振りしほりたいという気持ちになります。剣道を始め、仲間と共に辛い練習を乗り越えていく中で私は、周りの、自分自身に厳しい態度が自分の力となり、私の自分への厳しさが、仲間への力となることを知りました。仲間と共に剣道を励むことで、一人は皆のために、皆は一人のために努力することで、自分の限界を突きつめられるのだと思います。

剣道は形式上は対一の競技です。しかしその背はいつも共に頑張っている仲間達によって押されています。私は初段がとれたとはいえ、まだ弱くて剣道部員としてのつとめも果たせているのかどうかかわからないけれど、自分のために、また自分の背を押してくれるかけがえのない仲間のために、これからも稽古に励んでいきたいと思っています。

審査に合格  
された方々  
から投稿  
いただき  
ました。

九か月後に形の練習が入り、ようやく初段を取らなければならぬことを思い出し練習をし始めました。昨年やった形を思い出しながら繰り返しやりました。3ヶ月はすぐ過ぎてしまい、僕は初段の審査を受けました。実技、形、学科とあり、実技は受かったのですが、残念ながら形で不合格となり初段を取ることができませんでした。前の年に不合格者はいなかったし、自分で受かると思っていた分とてもショックでした。しかし、まだ二年生のうちにもう一度受けることができることを聞き、再挑戦を決めました。そこで形の講習会へ行きました。講習会で先生に沢山のことを注意され、それらも覚えることができました。一回不合格になった分受かった時はとても嬉しかったです。剣道は日本の歴史が入っているスポーツなので、色々なことが学べると思います。だから剣道をやりながら、その色々なことを学んで、身につけ、日頃の生活に生かせたいと思います。



### 再挑戦

剣道初段 片岡中二年

木村 与世布

僕は中学に入り何部に入ろうかと悩んでいました。そんな時友達にさそわれて行ったのが剣道部でした。僕が行った時に先輩が試合稽古をやっていて、剣道の試合を始めて見た僕には、とても迫力があり自分も剣道をやってみたくらいに入りました。

入部して何ヶ月かすぎて一級審査を受けることになり、その内容を部活で練習し合格する事ができました。その数ヶ月後に今度は二年生が初段の審査を受けるとゆうことで、形の稽古と一緒にやり、僕たち一年も形の大まかな動きを覚える事ができました。そして二年生は見事全員受かる事ができました。このときの審査で落ちた人は一人もいなかったそうです。先輩が「次はお前達だ。ガンバレよ。」と言ってくれ「初段を取らないといけないな」と思いました。しかし審査は一年後とだいぶ先の話だし、当然、形の練習もないのでしばらく忘れてしまいました。

# 剣道文化講演会

一月一七日、東京九段会館で全剣連主催の第二回剣道文化講演会が開催されました。およそ二百人の剣道愛好者が聴講しました。

この講演会は昨年全剣連記念大会で開催されたところ大好評を得たため本年も開催されることになったものです。全剣連専務理事大谷正俊氏の挨拶の後、福島大教授中村民雄先生の「時代をつな



中村教授：剣道の歴史と文化

ぐ剣道・その文化と歴史を問う・」そしてその後作家津本陽先生の「柳生兵庫之助と活人剣」が上映されました。

中村先生は、剣の概念から日本刀の出現、そして剣道の発生から現代の剣道へ歴史を追いながら講演されました。その中で強調されたことは、剣道に付随する価値よりも剣道のそのものの、特に個人がたづさわってこれほど長い期間なされる競技はほかにない。このすばらしさを再認識すべきである。また、日本文化「待ちの文化」を背景に、結果だけでなくその経過を大変大切にしている剣道、その経過のなかに人間形成の道があるので、と津本先生は、時代劇小説をこれまで数多く書く下してあります。それらを執筆される中での取材の経験からいくつもの話をされました。特に柳生新陰流と薩摩示現流についてには相当に造詣が深い。印象に残る話は、

## 時代をつなぐ剣道—その文化と歴史を問う—

中村 民雄 福島大学教授 (体育史・スポーツ担当)

### ◎著書最近の活動

#### ★全剣連での活動

- 『剣道と英辞典』(1996年)、『改訂版 剣道と英辞典』(2000年)
- 全剣連設立50周年記念誌『剣道の歴史』(2003年)
- 全剣連監修『近代剣道選集・全10巻』(本の友社、2003年)
- DVD『ビデオ』『時代をつなぐ剣道—剣道研究家語る その足跡と功績—』(2004年)
- ※本日の上映以外に、5月の全日本剣道連盟大会(京都)でも上映予定
- 剣道殿堂と剣道映像博物館(場所：九段以上の全剣連九段事務所併設の向い)

#### ★その他の活動

- 『民和文庫』(昭和53年開設)
- 『史料近代剣道史』(島津書房、1965年)、『剣道事典—技術と文化の歴史—』(島津書房、1994年)ほか
- 『日本武道論』『月刊武道』に「今、なぜ武道か—文化と伝統を問う—」を連載中

### 1. 剣道界の常識、一般の非常識(日本文化のあいまい性)

- ・体育：日本体育学会(Japan Society of Physical Education, Health and Sports Sciences) 国民体育大会(National Sports Festival) 日本体育大学(Nippon Sports Science University)
- ・剣道とは：剣道具を着用し、竹刀を用いて一対一で打突し合う運動競技種目の一つで、稽古を続けることによって心身を鍛錬し人間形成を目指す武道の一つ『剣道と英辞典』
- ・剣道の理念：剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である(昭和50年制定)
- ・何かというと、「剣道は遊びじゃない」「英辞典負だ」とか、「日本刀の精神」とかそんなことじゃない。剣道に付随する価値ではなく、剣道そのもの、しかも竹刀打ち剣道の価値。そこに目を向け、長くできることの価値を再認識すべきだ。
- ・剣道と他の格闘技系のスポーツと比べてみてください。子どもから老年寄りまで、バリバリの現役選手から70歳になる人が対等に試合ができ、しかも決して負けないような競技(他に弓道がある。勝てたらならぬ)。
- ・何かか、年をとるとともに「わざや技術」が向上し続けていく。熟練していく。職人の世界へ入っていく。そんなスポーツではないんです。剣道の「一本」は結果ではなく、経過(プロセス)をみて判定します。期間の疲労を決めるスポーツとは異なる。経過(プロセス)という価値基準をもっていること。もう一つが、この年令とともに読み・カン・コツといった身体感覚が研ぎ込まれていくものをもっている。このことが「人間形成の道」なんです。オンラインで通じる道なのです。
- ・日本文化は「待ちの文化」「静的な文化」、剣道で言う「後の先の文化」このことをしっかりと自覚して打ち込んでいただきたい。
- ・ただし、モラルが先にあるって実感が出てくるのではなく、まづそういうものが生まれ次第に実体化し、やがてモラルが出てくるのである

### 2. 武道(剣道、柔道、弓道)の名称

- 大正8年(1913)：大日本武徳会武術専門学校が武道専門学校と改称。以後、武徳会では、武道(剣道、柔道、弓道)と武術を区分する。
- ※同会副会長兼校長になった西久保弘道『武道講話』より。
- ※明治15年に柔道館を創設した嘉納治五郎が「柔道」という。
- 大正15年(1926)：学校体操教授要目の改正。教科名が剣道・柔道となる。

### 江戸時代の名称

- 武道：『甲陽軍鑑』江戶初期の甲州流軍学書。『蘭語訳撰』(1773)に「武道」とあり、一書に「武術」とある。武道と武術を区別する。
- 剣道：『蘭語訳撰』(1773)に「剣道」とあり、一書に「武道」とある。武道と武術を区別する。
- 柔道：『蘭語訳撰』(1773)に「柔道」とあり、一書に「武道」とある。武道と武術を区別する。
- 弓道：『蘭語訳撰』(1773)に「弓道」とあり、一書に「武道」とある。武道と武術を区別する。

### 3. 剣道の歴史：概念形成史と時代区分

- 1) 剣道の「剣」、剣の理法の「剣」とは何ですか？
  - 剣(けん)：鎌月(もろば)の太刀(『古語拾遺』)
  - 刀(かたな)：刀身が短い片月の刀物(『古語拾遺』)
  - ※『剣道と英辞典』の「剣道の理念」：剣は「Katana」となっている
  - ※剣は、「つるぎ」なのか、「かたな」なのか？
    - 都賀俊、 鎌
    - 太知、 劍、 太刀、 横刀、 刀
    - 賀太、 小刀、 刀子
  - ※故実研究家・鈴木重三『萬葉刀考』(『国学院雑誌』第57巻6号、1956年)によれば、「つるぎ」と「たち」は同義異名詞で、その大小によって、「たち」と「かたな」に区別されていた。と述べられています。また、「平安朝時代以来の記録資料の中に数見する種などは、全く太刀の意に用いている。ただし、種は専ら儀式の場合に多く、兵杖にあっては太刀と書くのを常としている」とも述べられています。
  - ※したがって、古くは剣のことを「たち」と呼んでいた。「かたな」は小刀(短刀)のことでした。また、剣(たち)の動作は儀式ではなく、あくまでも実戦的な兵杖のわざとして発展してきたことも押さえておかなければならないでしょう。室町時代後期に、腰にさす打刀(これを逸存「刀」または「太刀」と呼ぶ)が現れますが、これは区別しておく必要があるでしょう。『日本書紀』などの古い書物に、「撃刀・撃劍」と書いて「たちかき・たちうち」と記された理由がわかりやすくなりました。
- 2) 日本刀はいつ出現したのか？
  - 直刀→鎌造刀(日本刀様式)いつのことか? 『証』です。
  - ※『新造刀』は11世紀のこと、ここから日本式剣術(『新集』)技術が始まる。
  - ※今のところ、藤原純友・平将門が起した承平・天慶の乱(930年代)のころから刀化し、10世紀後半から11世紀にかけて日本刀が完成したと考えられています。この日本刀の完成に大きく貢献したのが奥州藤原氏集団で、彼らが造った「藤原刀」は新造刀の共通型でした。これが毛抜型刀へと発展し、さらに日本刀(古太刀)となりました。このことは、石井良四『藤原刀』(鎌山園、1966年)に詳しく述べられています。また、多くの合戦巻物に太刀姿の武士が描かれています。
  - ※「新造」技術の洗練化は、やがてそれを専門とする「造一室=家職」を産み出す。武術の中では、まづ大坪流・小笠原流の弓馬術が誕生し、次いで室町時代中期に、急流から分かれた中務流、神道流、陸流が流派として成立(剣道の源流)した。
- 3) 剣道の発生
  - ※しない(懐かしい)：上皇伊勢守頼朝が鎌倉宗廟に手ほどきしたときの「印可状」永禄8年(1565)。
  - ※三河長義：天正3年(1575)。
  - ・剣道具：寛文3年(1663) 直心流の頼原伝心頼春(晩年の称、持谷伝心直流)から大沢友右衛門の伝書に、「絶流二子八種古之流、皮具足、面盾(あご)サマサマ道具ヲ用テ稽古ス」とある。
  - ・剣道の語：安徳頼朝が寛文7年(1667)に流名を「安徳立剣道」とした。
  - ・剣道具の完成：直心流の山田平左衛門『兵法雑記』(正徳年間)の「吟味及し之事」に、「右真勝良二至テ八、而手袋小具足ヲ整メ、互ニ道流ヲ勇気一法ヲ尽シ、入道可「鍛錬者也」とある。
  - ※しない(打突しあう「打込み稽古法」を開発したのは、実際には、平左衛門の息子・長四郎左衛門源隆です。時に、正徳年間(1711~18)のことでした。これが今日の剣道の直接的ルーツです。
  - ・中西足助『一刀流兵法精義』(文久元年版)に、「抑も中道二子、シナヘ打合初リシ道流(らんしょう)ハ、宝暦年中(比)ころ」とある。
  - ※さらに、安永年間(1751~64)に、一刀流の中西忠直武が新法を着け、竹具足を用いて打込み稽古をはじめると、またたく間に多くの流派に広がっていく。他流試合も行われるようになりました。
  - ・北沢一刀流「新編六十八手」：技の体系化、弘化、安永年間(1844~54)のこと。
  - 『千歳成政先生夜話問答』(嘉永6年ころ)に打突部別列の「新編六十八手」に、「造込前・起眼前・握前・両手突・片手突・突突・握前・握前」など技名あり。
  - ・高野佐三郎『剣道』(1915年)では、「手法五十種」となる。
  - ・戦後の学校剣道は、「しかけわざ・応じわざ」となり、全剣連「幼少剣道指導要領」では、「しかけていく技・応じていく技」になっている。

津本先生は、時代劇小説をこれまで数多く書く下してあります。それらを執筆される中での取材の経験からいくつもの話をされました。特に柳生新陰流と薩摩示現流についてには相当に造詣が深い。印象に残る話は、

現在全国に色々な古流があるが、誠に残念なことではあるが、ここ二十年の間に途絶えてしまう流派が数多くでてしまうだろう。また幕末の時代、土佐長州方の取材資料の中に当時の一番の使い手は「近藤勇」であるということであった。



津本先生：取材からの色々なこと

「幕末御用盗」です。これは薩摩示現流の剣士の物語であるような。みなさんも一読されてみては。また、DVD「剣道殿堂」その足跡と功績」は支部総会の折りにも皆さんで鑑賞するものよいかも知れません。柳生宗矩から始まり私達の郷土の剣豪、持田範士の足跡、功績が紹介されております。

# 上州の天野八郎

## 風雲児 ラスト・サムライ

二月に高崎シネマでラストサムライを鑑賞しました。

映画の物語は、明治も初期の時代、西洋列国の言われるがままの政府をみて死をもつて天皇に衷心する武将勝元（渡辺謙演ず）とそして勝元らと行動を共にするアメリカ軍将校の物語です。アメリカの人がとらえた日本だから何となく不自然な場面も感じましたが、霧間から現れる騎馬武者軍団など戦の場面はアメリカらしく壮大なスケールで描かれていました。

さて、わたしたちの郷土にも維新の大波に飲み込まれていったひとりのラスト・サムライがおります。上野彰義隊副長天野八郎をご存じでしょうか。

私は歴史には疎い方ですから最近まで知りませんでした。昨年上毛新聞で富岡市の歴史研究



八郎36才

家が天野八郎について紹介していたため過日、南牧村民俗資料館を訪ね市川館長先生に色々聞かせていただいた。



天野八郎を育んだ磐戸の里

この天野八郎は、甘楽郡磐戸村（現在の南牧村磐戸）に天保二年三兄妹の真ん中に生を受けました。幼名を大井田林太郎と称し父親は江戸で旅館を経営していたため、厳格なる母親は一人の下で育てられました。幼き頃より学問を好んだようであり、滝山不動寺において禅の精神を学んだといわれております。十四歳の時、全国を揺るがす騒然たる時代の動きはここ上州の片

田舎にまでも伝わり、聡明で大志を抱いていた林太郎は最早じつとしていられず父を頼って江戸へ上ったのであります。それからしばらくは文武に励み、ことさら剣撃については幕末の剣豪直心陰流男谷精一郎門下で修行し、直心陰流五剣士といわれるまでに上達をしたといわれます。その五人の中には勝海舟、榊原健吉、島田虎之助などがいた。この直心陰流と黒滝山での禅の修行が後に佐幕に投じた天野八郎を形成させた要因であるといわれています。

その後、林太郎二十歳の時に父親が亡くなり、やもなく林太郎は磐戸の郷へ戻った。村の人たちに書や剣撃を教えながらも、きつともんもんとした日々を送っていたに相違ありません。

文久三年林太郎三十歳、再び上京。世は外国船打ち払い令の最中。林太郎は外国船爆破のための水雷艇を考案し、これを幕閣に建議しました。この水雷艇はその後日の目を見ることはありませんでしたが、これ以後林太郎は名だたる幕臣と肩を並べるようになりました。

大井田林太郎改め天野八郎と名乗り始めたのはこの頃で、なぜ「天野八郎？」の謎にはこれは推測する他ないようです。自

らの生まれ所、磐戸が古事記に記される「天照大神が天のいわとにお隠れなつた」このいわとに通ずるということである。また名前の八郎は兄様が喜八郎との名前が由縁と、これも推測である。

さて、彰義隊とは、薄学の私には、江戸の新撰組みたいなものだろうか。と思っております。似たようなものですが、新撰組は浪士の集団であったが、彰義隊は徳川一橋家の重臣達が中心となつて將軍慶喜の警護と江戸市中の治安を目的に結成されたものである。このとき天野は一橋重臣泷沢成一郎らと肩を並べて隊の結成に手腕を果したのである。新撰組は京の市民に恐れられたようですが、この彰義隊は江戸市民にすこぶる評判よく「情夫（いろ）を持つから彰義隊」と色町界限では囁かれたそうです。

この彰義隊江戸城開城の後、慶喜が上野寛永寺に謹慎していた間はなんとか統率もとれていた。やがて隊は諸藩の脱藩者も多く加わり三千名近くに膨れあがっていた。慶喜が水戸へ引いた後は、まさに錦の御旗を失いしが如く統率を逸し、官軍との小競りあいも惹起。結果、慶応四年五月十五日とうとう上野戦

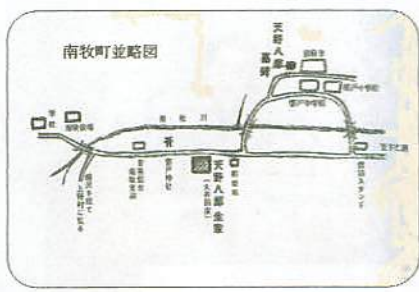
争に火ぶたが切られてしまいた。開戦に際し天野と隊長泷沢は意見を異にしてしまい、泷沢が隊を去り、隊の指揮統率は天野八郎がとることとなった。

「徳川のご恩に報いるのは今しかない。みな共に死のうぞ」と天野は号令。官軍の重火器アームストロング砲の圧倒する中であったが上野黒門での戦いは今でもその激しさが伝えられております。激戦は半日で勝敗をわけ、彰義隊士はちりぢりとなつた。天野八郎もまだまだ諦めず再挙を計ろうと市中に潜伏したが、官軍方の厳しい搜索に捕らえられ、その後、獄中で病のため仲間に見守られながら、義に生き義に殉じた三八年の生涯を閉じました。

大正六年、天野八郎の磐戸村への分骨の際に、元彰義隊士本田晋が次のように詩っています。



南牧慈眼寺八郎の墓：枯れ尾花倒れてそよぎ止みにけり



「もののふの勇ましき名は鑄川 永く流れて 世に伝えけり」

今は三月、南牧の谷里も草花の芽吹きを迎えております。時もさほどなくしてその道端を、多くのかたくりの花がちらちらと見守られながら、義に生き義に殉じた三八年の生涯を閉じました。

風雲児天野八郎がこの奥深き谷里から歴史の大波に一矢を投じたと身肌感じられた時、あなたはきつと気分はラストサムライです。

### 編集後記

早くも年度末になってしまいました。なんとなく始めてしまった高崎支部剣道つれづれ。まだまだあまり読まれていませんが趣味と実益を兼ねて来年度も続けて行きたいと思っております。とにかく記録として手元においていただければそれでいいです。ぜひよろしく。